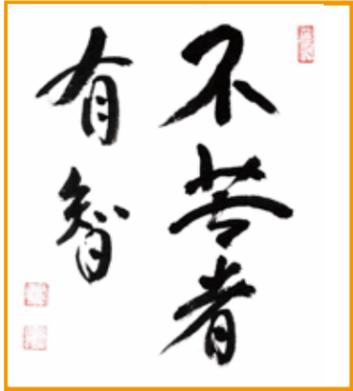


◇ご存じ、「時そば」という落語があります。屋台でそばを食べた客が代金を支払うときに、一文づつ数えて「何時だい」「九つで」とお、「十一、十二」と、やって一文ごまかしたのを見ていた粗忽者がまねをしたら、時刻が早すぎて、一文損をしたという噺。九つというのは、今でいう深夜零時頃のことらしい。江戸時代は、一日を十二干でもわけていたから、九つは「子(ね)の刻」ともいう◇やっとな出てきました。今年の干支は、「子」です。なんで「子」が「ネズミ」になつて……、というのは古代中国人が考えた暦だから、書くとき複雑になつてしまふ。だから、ここでは書かない。

編集後記

というか、暦は科学なので、「坊さんにならぬのだから足し算だけでよければよい」と育てられた超文化系人間の私には、よくわからない◇自分でよくわからないことを、わかつたふりして話したり書いてもすぐにはわかってしまいます。言葉が自分のものになつていないから、説得力がないのです◇十年前ほど前に急逝された松原哲明師から、生前に教えていただいたことがあります。「本を読んでも、どうもわからないナと思つたら、オマエの頭

現代の若者ことばというのが、オジサンにはよくわかりません。「このケーキ、めっちゃ、やばい」と言われて、「そんなにまずいのか。もしかしたら食中毒の恐れあり」。なんて思つて敬遠したら、今どきのグルメにはなれません。近頃の若者は、「やばい」を「素敵だ、最高だ」という意味で使うのですから。若者ことばに限らず、わかりにくい言葉や文字というのが、あるものです。そんなふうによく、こんなお叱りが聞こえてきます。「いちばんわかりにくいのは、坊さんのお経だ」と。次のような声もあがるでしょう。「寺の床の間にある掛け軸や色紙の文字も読めないし、意味も難しい」。だから、正月早々わかりやすい色紙をかかげました。「不苦者有智」は元妙・心寺派管長・河野太通老師の御染筆です。太通老師は昭和五年のお生まれですから、九十歳になられます。色紙は「苦ならざる者、智有り」と読めばよい



が悪いからではない。書いた本人もわかっていないのだ」と。もつともな話で、このアドバイス以来ずいぶんと気が楽になり、難しい熟語や横文字ばかり使う文章や話に出会うと、「おまえ、わかつてないな」と、ひそかににんまりするのです◇とは言いながら難解な漢字が使われているから、わかつてないのが書いてあるかというところ、そうとも限らない◇学生のテスト風にお尋ねします。次の字にフリガナをつけよ。「齋す」。正解は「モタラス」です。またまた、坊さんの難しい文章に使われていたんだらう、なんて思わないでください。令和最初の秋に封切られた、福山雅治と石田ゆり子主演の恋愛映画、『マチネの終わりに』の原作に登場する漢字です。原作者は芥川賞作家の平野啓一郎、もともと難解な漢語を使う作家ですが、この恋愛小説にでてくる「放蕩息子」という四文字から、キリスト教の『聖書』と仏教経典の『法華経』の秘密を読み取つたのは、自慢するわけではないけれど、と言いつつながら自慢するけれど、この私です。詳しくは一月八日発売の月刊『大法輪』(令和二年二月号)に連載の『マチネの終わりに』と『聖書と法華経』を読んで！。(博芳)

でしようか。出典は不明ですが、書かれた経緯は伝え聞いています。なんでも、エッセイストの森下典子氏が「不苦者有智」の色紙を所望したらしい。そうしたら、老師は知識の「知」ではなく、智慧の「智」と書いて、女史に贈つたといひます。森下さんは「昨年の秋に封切られた映画『日は好日』の原作者です。女優の樹木希林さんの遺作のひとつで、話題になった映画でした。仏教は智慧の宗教と言われるくらいですから、「知」ではなく、「智」としたのは、現代の高僧と慕われる河野老師。さすが、ですが、しかし、この色紙、もう少し深い読み方があるようですよ。漢文で「者」には、「ハ」とフリガナをつける事があります。そうすると、「不(フ)苦(ク)者(ハ)有(ウ)智(チ)」。何のことはない、「福は内」。坊さんの書は、やばい、か？(住職記)

連続シリーズ「見つけた」

ある檀家さんからこんなお尋ねがありました。「仏壇を新しくしたいのですが、どんなのが良いでしょうか」。こうした問いかけを受けた時は、いつも次のようにお応えします。「仏壇は入れものだから、仏具店で仏壇を買わなくても、今ある家具でもよいし、気に入った家具を買って、それに位牌をおまつりすれば！香炉は何でも良いヨ。茶碗も香炉になるし、花入れだって香炉になる」と。



「見つけた！」
「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

檀家ではない、数十年来の知人が昨年そろえた仏壇です。事情はこうです。ご両親とも亡くなって、実家を片づけることになった知人は、お仏壇を今住んでいる家へ移そうとします。でも、自宅はアーリー・アメリカン風。伝統的な仏壇はどうにも合いません。そこで、私に相談してくれたので、先述した持論をアドバイスしました。ここまでは、最近よくあるパターンで珍しくありません。でも、私の言ったことを忠実に実践してくれたのは、珍しいことです。まず、写真にある白いキャビネットは普通の家具屋さんから数万円、片手で数えられる価格で購入したとか。本尊さまとお位牌は、古い仏壇から移しました。

線香を横に置く香炉と、鈴は仏具店で買ったようでも、ボツと何にも考えないで仏具店のいいなりでそろえたセットには、それほどの思い入れはないのでは。なんて言つてばかりでは、説得力がないから、住職も実践しています。たとえば、焼香する人数が多いので製造されたしっかりしたものをしていますが、普段の少人数の年忌法要などで、焼香する香炉は抹茶茶碗に灰をいれたものです。以前は、花器を転用していました。香入れは、料理で使う小鉢です。こんなふうにも書いても、松岩寺住職の言うことはあまり信用してくれない。でも、日本で最初の禅寺を名のる、九州は博多の聖福寺で、ご住職が焼香する香炉は茶釜でした。なんでも良いのです。ただし、線香もロウソクも火を使うものですから、「火の要慎」第一に。新しい年、もしかして仏壇や仏具を新しくするのならば、センスの見せどころです。